国府台女子学院小学部　　2023.10.2

仏教通信「心身一如について」10 月

厚生労働省では、毎年10月を「臓器移植普及推進月間」と定めています。臓器移植とは、病気や怪我で身体(内臓)機能が著しく低下した患者に、他の人から臓器を提供してもらう手術のことです。この臓器移植を行うことで、患者の命を救い、身体機能を回復する事ができます。ただし、日本では欧米と比べ臓器移植が普及していない状況であり、国内16,000 人の移植希望者の内、移植手術を受けられる人は年間400 人しかいません。そこで、厚生労働省では、国内の臓器移植手術を推進したいという考えから、普及活動を熱心に行っています。

欧米において脳死臓器移植が普及した背景には、キリスト教思想の「霊肉二元論」や、フランスの哲学者デカルトの説いた「物心二元論」が欧米の人々に定着しており、肉体（物質）と心（精神）を分けて考え、脳機能が停止し、意識を消失する「脳死（脳全体の機能は失われているが、生命維持装置により肉体が生かされている状態)」を「人の死」と捉える考えにつながったといわれます。

そして、仏教では肉体(遺体)に対する執着はありませんが、二通りの考えがあります。まず、一つ目は「心身一如」の思想で、人の心は脳だけの機能ではなく、人は全身で感じ、髪の毛や爪にいたる全身に命が満ちていると考え、脳機能が停止した脳死が、そのまま「人の死」ではないと捉えます。

二つ目は、「捨身布施行」という仏教思想があり、それは、他者の為に我が身を犠牲にし、他者を生かす行いのことであり、臓器移植は、苦しんでいる他者のために、臓器を提供する事は、仏教の「捨身布施行」にあたると尊い行いであるという考えです。

今月の「臓器移植普及推進月間」は、臓器移植を広める目的だけではなく、「生と死」について自分の事として捉え、命の価値や選別が、国の経済力や貧富の差によって生じないように、私たち一人一人が「いのち」について学ぶ機会であると考えてほしいと思います。

スジャータの布施

小学部礼拝委員会